

大学記念館の窓から

—「東亜同文書院大学記念センター展示室利用状況」より—

東亜同文書院大学記念センター事務室 森 健一

1. はじめに

東亜同文書院大学記念センターでは、毎年、『同文書院記念報』にて大学記念館内にある記念センター展示室の利用状況を掲載し、そこでもおもに毎年の利用者数や、予約参観記録を紹介している。今年度は、新名古屋(ささしま)校舎が開校し、豊橋校舎から経済、コミュニケーション学部が移転したため、来館者の減少が心配されたが、全体としては3,034名(昨年度比約500名増)となった。しかし、これらの数では計りきれない、思い出深い出来事が数多くあった。

そこで、記念センターの受付窓口にいる私の視点から、おもに学生の来館や書院卒業生を訪ねて来館された方、そして2012年6月開催した特別展にまつわるエピソードをご紹介します。

2. 愛大生の来館

今年度より愛知大学新名古屋校舎が開校し、豊橋校舎から経済学部や国際コミュニケーション学部等が移転した。これにより記念センターを訪れる学生の減少が心配され、事実、ゼミによる利用学生数は昨年度と比べるとほぼ半数に減少した。しかし、説明員による熱のこもった展示品の解説は学生が減少しても変わらず、特に、地域政策学部の安福先生のゼミでは、武井研究員による解説が大変好評であったために学生から初となるリクエストを受け、後日再度のご来館があった。また、功刀先生のゼミでは発表の場として館内の講義室をご利用下された。さらに、今年度はセンター長でもある馬場教授による、現代中国学部の1年



地域政策学部安福教授のゼミにて武井氏による解説

生の記念センター訪問企画が実施された。東亜同文書院における現地・中国での現場主義という点は現代中国学部の現地プログラムにも受け継がれているが、ここで書院に関する展示物を見ながら、研究員による説明を聞いたという体験が、今後現地プログラムを履修する学生にとって、現代の中国を体験する上で実りある行事であったかと思われる。



総勢147名が大型バスで、現中キャンパスツアー

3. 書院卒業生を訪ねて

2012年夏、書院34期卒の深川操一郎氏のご息である深川勝郎様が佐賀県からお越しなられた。

書院生であった父上は、若い頃から大陸雄飛を目指し、中国をこよなく愛していた方でした。その父上の足跡を辿り、その生き様を記録として孫子に残しておきたいという思いから、父上に関する資料を求めてお越しになった。

34期生であった深川操一郎氏は、在学中の1937年には通訳従軍学生(第6陣第十軍報道班)として、上海から蘇州、湖州、杭州までのルートを全て水路を舟艇で行動した体験をお持ちの方である。この父上の従軍記録の一部は、1993年4月に出版された34期生会の従軍記『長江の水 天をうち』の中で、「水路を征く」というタイトルで掲載されている。

父上の操一郎氏は卒業後、満鉄にて勤務され、現地にて召集を受けたが、終戦後は、佐賀県庁に入庁し、経済関係の部署や佐賀空港建設に関して有明海埋め立てプロジェクトのリーダーの一人として参画された等のご経歴がある。その時は巨大な空港の青写真を家に持ち帰り、夜中までうんうんと唸りながら地図をながめていたという思い出話を語られた。

はるばる佐賀県よりお越しいただき、感慨深くアルバムのお上の写真をご覧になられたり、大旅行誌にて父上がかかれた『北京的飯店』をお読みになっている光景は、大変印象深いものでした。



父上の思い出を語られる深川氏(写真中央)

4. 築100年愛大公館特別展ほか記念行事

2012年、愛知大学公館は築100年を迎えた。この愛大公館特別展によって、大変多くの方が記念館に来館されました。さらに、今回一般の方には初となる公館内部の見学会をこの100年の節目に実施できたことは、とても意義があったと思われる。



特別展初日。入り口には多くの来館者であふれました

ほかに、2013年は岸田吟香生誕180周年ということで、豊田市郷土資料館による企画展の開催にあたり、当センターの展示品である愛知大学校章の利用申請を受けた。岸田吟香の孫・劉生氏の弟子である高須光治氏による作品というつながりから依頼いただいたもので、当センターにとっても岸田吟香氏は大変重要な人物である。

以上、2012年度の記念センターでの出来事の一部を私の視点から紹介したが、この記念センターを含む大学記念館という場所は、学生にとっては出身大学のルーツをめぐる場所であり、また書院の関係者にとっては過去の偉人の足跡を思いめぐらす場所であり、地域の方々にとっては展示の品々や、当時の建物に触れて地元の文化遺産を再発見することができる場所だと思われる。

最後に、2013年は日越国交40周年ということで、日本とベトナムとの交流についてスポットが当てられている。その点で、東京同文書院に関して研究者やマスコミより、問い合わせが多くあった。今後そういった方面で新たに記念館・記念センターが注目される機会が増えることを期待しつつ、さらに多くの方々に来ていただける企画をし、実施していきたい。